

小学生の家庭における昔ながらの住生活文化の継承実態 —保護者の住生活経験と児童の生活実態との関係性を中心に—

The Succession Actual Situation of Traditional Housing and Living Culture
in the Family which have Elementary School Students
—The Relations between Parents of Housing and Living and the Children's life—

○奥田 千尋^{*1}, 碓田 智子^{*2}
OKUDA Chihiro, USUDA Tomoko

Japanese traditional housing and living culture is getting to disappear in our daily life. This research aims to examine the actual condition of traditional housing and living culture in the family which have elementary school students. In this paper, we surveyed about 300 elementary school students and their parent by questionnaires. The results are as follows. 1) In the daily life, it is difficult to tell children traditional housing and living culture, especially for parents who don't have experience of the traditional season event and life style. 2) Many parents wanted school to teach their children traditional housing and living culture.

キーワード：住教育、住文化、住生活、住意識、小学生

Keywords: Housing Education, Housing Culture, Living, Housing Consciousness, Elementary School Students

1. はじめに

住まいや住生活の変化とともに、日本の伝統的な暮らしの中で育まれてきた住文化が姿を変えたり、失われつつある。障子を張り替える、座敷をはたきやほうきで掃除する、季節に応じてしつらいを替えるなど、かつてはごく普通に見られた日常生活の光景が、現在ではおとなには懐かしく、子どもには珍しいものになってきている。

本研究は、昔ながらの住まいや暮らしの文化を次代を担う子どもたちに継承していくことは、地域の気候や風土に根ざした住まいの良さを理解した、サステイナブルな住まいづくりにもつながるのではないかとの視点に立ち、子ども、特に小学生を対象とした住教育に向けての基礎的資料を得るものである。

現在の小学生は、掃除一つを取り上げても、基本的な道具類を使う力や工夫する力が大きく低下しているように感じられる^{注1)}。これは、住まいや住生活の変化、あるいは住宅設備や家電機器の高性能化とともに、昔ながらの住まいや暮らしにみられた知恵や工夫を家庭内で学ぶ

ことができなくなっていることが、その要因の一つではないかと考えられる。

小学校教育の中でも、住まいに関わる学習内容が設けられているが、住まいや暮らしの文化を学ぶ機会は少ない。従来、学校教育での住まいの学習は「家庭科」の一領域として扱われてきた。しかし現行の小学校学習指導要領^{注1)}では、「快適な住まい方」「環境に配慮した生活の工夫」などの単元で住居にかかわる学習をするが、住生活の文化にまで踏み込まれた単元はない。

1990年に導入された小学校1・2年生での「生活科」では「お家の仕事(家事の手伝い)」や「まちたんけん」などの単元で住まいや暮らしに少し触れるが、年齢的にも深く取り扱うことは難しい。また「社会科」中学年の「昔の暮らし」の単元では、暮らしの道具や住まいの変遷などを、高齢者からの聞き取りや博物館見学を利用して学習するが、教科の特性上、調べ方やまとめ方の方法に時間が割かれ、知識を得ることが主な目的となり、住文化の継承にまでは発展させられていない。

*1 八尾市立安中小学校・教諭 (大阪教育大学大学院)

*2 大阪教育大学教育学部・教授・学博

Teacher, Yasunaka Elementary school in Yao-City
Prof., Faculty of Education, Osaka Kyoiku Univ., Ph.D.

他方、2002年「総合的な学習」（3年生以上）の導入により、幅広い課題が教材に取り上げられ、外部からの専門家等による学習支援が盛んにおこなわれるようになった。また2008年3月改定（2011年4月全面実施）の新学習指導要領では、様々な教科や活動で伝統文化を重視する傾向がみられる。これによって、学校教育の中で、住まいや暮らしの文化の学びを取り入れられる可能性が広がってきた。

本研究は、教科や活動に横断的な対応ができる小学校教育を対象とした住まい学習の提案を目指す。本稿ではその基礎研究として、小学生の家庭における住まいと暮らしの文化の継承実態と保護者の住意識を明らかにすることを目的とする。特に、小学生が暮らす住宅そのものの変化や、保護者の住生活経験が脆弱になっていることが、住文化の継承を困難にしているのではないかという点を検証することに主眼を置いて、保護者の住生活経験と児童の生活実態との相互関係を考察する^{注2)}。

2. 本研究にかかわる既往研究および実践事例

学校教育における住教育に関する研究は、家庭科教育における住居領域の指導内容の現状や問題点の分析などが、早くから進められている^{文3)}。その後、学習指導要領の改訂、中学校・高等学校での家庭科の男女共修、総合的な学習の時間の導入などを経て、近年では、学校教育の中にも、大学等の研究者、建築士などの専門家、自治体職員、NPOなどが関わって、多様な住まい学習が展開されるようになってきている。

たとえば、教育関係や専門家、NPOなどの研究交流の場となっている住宅総合研究財団の「住まい・まち学習」実践報告・論文集^{文4)}には、2000年から10年間におよそ270の論文・実践報告が掲載されている。その約半数はまちづくり学習に関するもので、建築士・大学関係者・博物館などによる学校の授業以外を対象とした研究・実践報告が多い。学校教育としての実践研究は、約50例あり、総合学習でのまちづくりをテーマにしたものが多くを占める。その中で小学校教員による実践事例（約30例）の多くは建築士などの専門家や大学関係者、地域や自治体、NPOなどの支援で実践されたものである^{文5)}。

小学校へ住まい学習の出前授業として、専門家を派遣する自治体も見られる。関西でも、兵庫県建築士会の住教育支援チームと神戸市住まいの安心支援センター「すまいるネット」との協働による住まい学習のサポート^{文6)}や大阪府八尾市での「八尾すまいまちづくり研究会」^{注3)}

の建築士らとの協働による出前授業など、地域の特性を生かした学習支援が報告されている。

このように住まい・まちづくり学習については多様な実践が報告されているが、昔ながらの住まいの文化の継承に視点を置いた報告は、博物館を利用したワークショップや地域の歴史的な町並み調査^{文7)}、学校の和室を利用した住まい方学習^{文8)}などにとどまっている。本研究のように、日本の住まいや暮らしの文化継承の視点から、現在の子どもたちを取り巻く住まいや暮らしの継承実態を検証する研究は少ないといえる^{注4)}。

3. 研究の方法

現在の住まいでは和室やそれに伴うしつらいが減り、昔ながらの季節の行事や住生活を体験する機会が減少しているのではないかと、また小学生の保護者の世代でも昔ながらの日本の住まいや暮らしを知らない人が増え、それが子どもの住生活や意識にも反映しているのではないかと考え、家庭科の学習が始まり家事に触れる機会の増える小学校5年生と、その保護者を対象にアンケート調査を実施した。

本研究での「昔ながらの住生活」とは、小学校での昔の暮らしの学習を踏まえて、小学生の祖父母が子どもの時代、つまり40～50年前頃にはごく普通に見られ、保護者の子どもの頃には、減少しているとはいえいくらか残っていたと思われる住生活の様子を想定している^{注5)}。アンケート調査では、保護者の子どもの頃の時代を特定することは難しいため、成人前の実家での生活と設定した^{注6)}。

調査項目は表1のとおりである。「昔ながらの住生活」がすでに変化し始めていたと思われる保護者の成人前の経験の程度が、現在の家庭での住生活に関係しているのではないかとという視点から、⑤の項目の設問を設けた。これ以外の項目は、児童の調査票でもほぼ同じ内容を取り上げた。

調査対象とした八尾市は、大阪府の中央東部に位置し、生駒山地を境に奈良県と隣接する。総面積約42km²、人口約27万人で、住宅・マンション・商業施設・中小工場・田畑・山林などの混在する地域である。市内29小学校から居住環境に特徴^{注6)}のある5小学校を抽出して調査を行った（表2）。調査は、2009年10月末に、各学校に依頼して児童用と保護者用の調査票を児童に配布し、家庭で記入後、封書にて保護者・児童分を同時に回収する方法で行った。配布数は5校の5年生合計390人で、回収は、児童319人（回収率81.8%）、保護者323人（回収率82.8%）であった^{注7)}。

表1 調査票の主な項目 (○印は調査票に設けた項目)

項目	内容	保護者	児童
①現在の住宅の概要	住宅の形式(木造or非木造・戸建or集合)	○	○
	居住環境	○	
	和室にかかわる建具やしつらいの知識		○
	和室にかかわる建具やしつらいの有無	○	○
	和室の形態	○	
②季節の行事	現在の実施程度	○	○
	現在の実施程度	○	○
③昔ながらの住生活経験	現在の実施程度	○	○
④家事の手伝い	家事の手伝いの実施程度		○
⑤成人前の経験	成人以前の住宅の概要(①とほぼ同内容)	○	
	住宅の形式別の居住経験	○	
	季節の行事の成人前の実施程度	○	
	昔ながらの住生活経験の成人前の実施程度	○	
⑥祖父母などについて	同居状況		○
	伝承機会があるか	○	
⑦昔ながらの暮らしについての意識	和風の暮らしが好きか	○	○
	住宅に和室があったほうがよいか	○	○
	昔ながらの季節の行事が好きか		○
	季節の行事を子どもに体験させたいか	○	
	日本の住まいのよさを子どもに伝えたいか	○	
⑧学校教育への要望	学校で教える機会があったほうがよいか	○	○
	どのような場や方法で教えてほしいか	○	

(児童の調査票はわかりやすい表現やイラストでの説明を加えている。)

表2 調査対象校区の概要

	人口(人)	世帯数(世帯)	居住地の特性
A小学校区	12,330	5,617	近鉄八尾駅南側・市中心部 市役所に隣接。住宅と公共施設・店舗・事務所など混在 第1種居住地域・商業地域
B小学校区	10,602	4,675	JR八尾駅北側 住宅・高層マンション・店舗・中小工場などが混在 第1種・第2種居住地域
C小学校区	7,605	3,056	旧大和川(玉串川・長瀬川)に挟まれた土地 純農村地帯であったが、近年住宅化が進む 第1種居住地域・第1種中高層住居専用地域・市街化調整区域
D・E小学校区	9,639	4,051	高安山・信貴山のふもと。自然環境に恵まれた小規模校 古墳等の史跡・田畑・山林に囲まれた旧村 ほぼ全域市街化調整区域

(2009年3月31日現在)

4. 現在の住宅について

回答者のうち56%が市街地校区(A・B校区)在住のため、居住環境は「マンションと戸建て住宅混在地」がほぼ半数を占めた。「自然豊かな地域」(24.5%)は、ほとんどがD・E校区である(図1)。住宅の種類は、「木造戸建て」が最も多く約60%、次いで「RC造の集合住宅」が約25%あった(図2)。

和室のない住宅は約10%であったが、和室があっても1部屋だけの住宅が約半数をしめ、続き間がある住宅は20%にも満たなかった(図3)。

一方、約90%の住宅に和室があるが、襖や敷居は70%台しかなく、和室にかかわる基本的な建具やしつらいがそなわっていない住宅が少なくないことが分かる(図4)。障子を例にみると、和室が1部屋だけの住宅では約60%にしかそなわっていない(図5)。また、床の間の保有率は、和室が1部屋だけの住宅では30%弱である(図6)。和室があっても障子や床の間が備わっているとは限らず、本格的な和風住宅はかなり少ないと推察された。

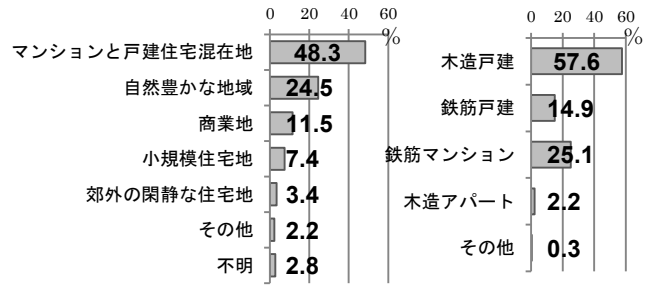


図1 居住環境

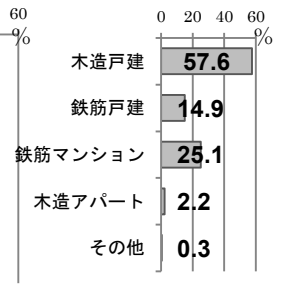


図2 住宅の種類

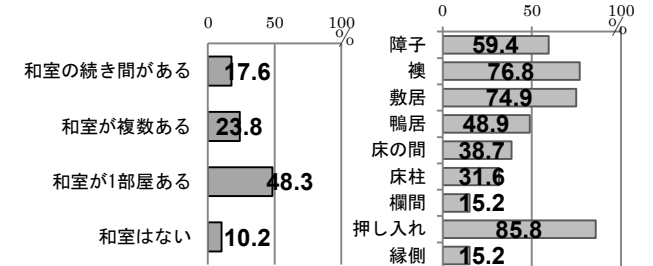


図3 和室の形態

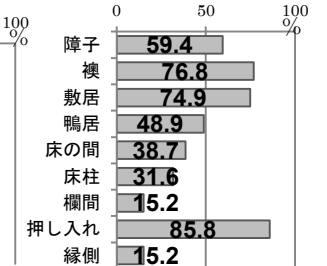


図4 和室にかかわる

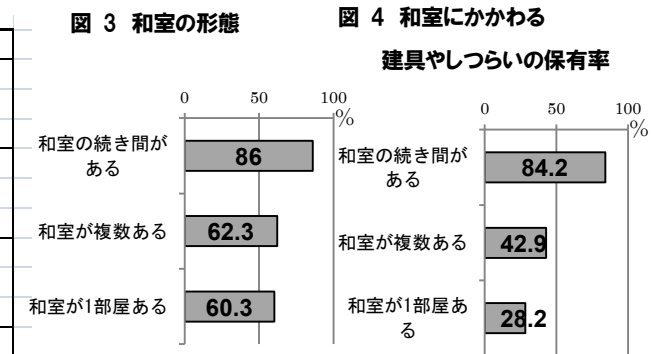


図5 和室の形態別

障子がある割合

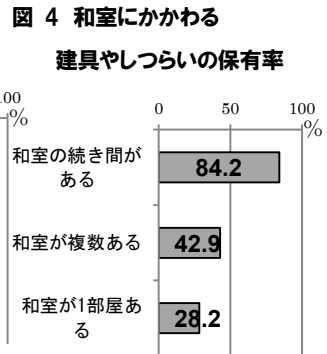


図6 和室の形態別

床の間がある割合

5. 保護者調査からみた住生活の実態

5-1 住生活経験について

昔ながらの住生活経験について、図7に挙げた項目で保護者の現在と成人前の経験を、それぞれ「よくする(していた)」「たまにする(したことがある・やり方を知っている)」「していない(したことがない)」の3段階で回答してもらった。

現在について「よくする」の回答をみると、「玄関先をほうきで掃く」「季節によって敷物や飾り物をかえる」は比較的実施程度が高い。一方、「はたきを使ってほこりを落とす」「ほうきを使って畳の部屋を掃除する」「蚊帳をつけて寝る」「火鉢で手を温めたり餅を焼くなどする」は、かなり低い回答結果であった。これらの行為をするための生活道具自体が、現在では家庭から姿を消したことの反映であると考えられる。また、「畳を上げて掃除する」は、現在ではほとんどない。畳の部屋はあっても、掃除の仕方が大きく変わったことがうかがえる(図7)。

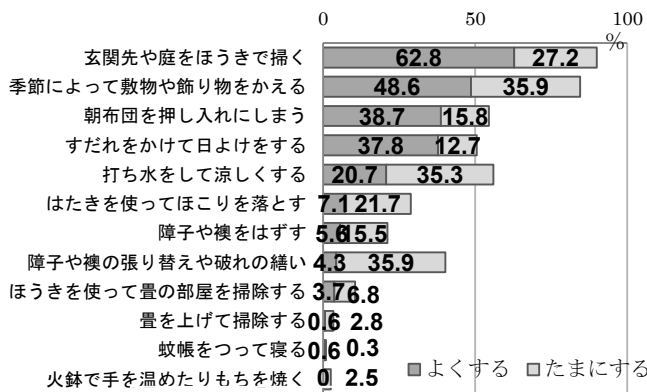


図7 現在の住生活

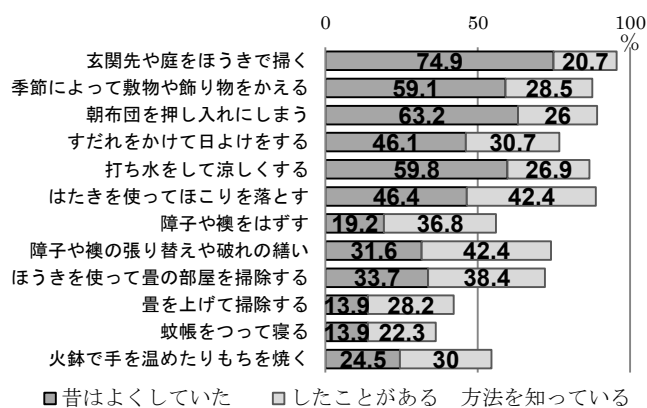


図8 成人以前の住生活経験

成人以前の住生活経験は、すべての項目で現在より実施程度が高かった(図8)。現在ではほとんど見られなくなった道具類も、保護者の成人以前にはまだ使われていたと思われる。この間に、四季の変化へのかかわり方や、暮らし方が大きく変貌したことがうかがわれる。

つぎに、現在の住生活について3段階で回答してもらった結果を、「よくする」3点、「たまにする」2点、「していない」1点と得点化し、合計点の分布を極端な差がない程度にほぼ3等分して、グループ化を試みた(図9)^{注8)}。各グループの構成は、高位群89人(27.5%)、中位群113人(35.1%)、低位群121人(37.3%)であった。同様にして、保護者成人前の住生活経験についても得点化・グループ化を試み^{注9)}、現在との関係を見た。

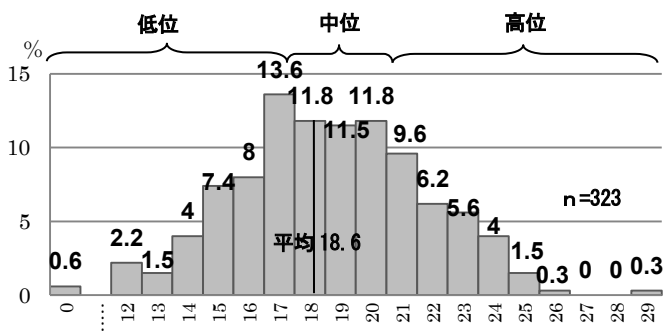


図9 保護者・現在の住生活経験得点化分布とグループ化

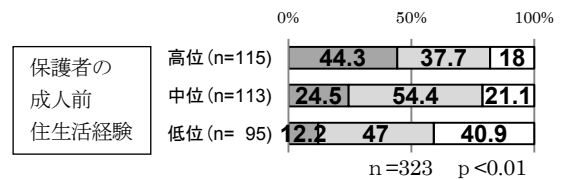


図10 保護者の成人以前と現在の住生活経験の程度について

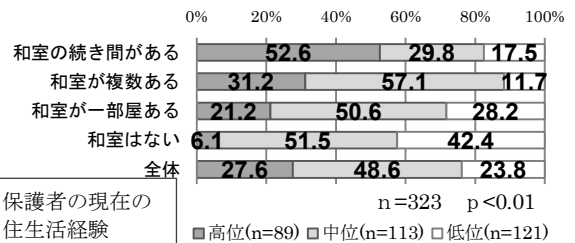


図11 和室の形態と現在の住生活の程度について

保護者の成人以前と現在の住生活の実施程度の間をみると、成人以前の経験程度が高い保護者は、現在もよく実施している傾向がみられる(図10)。逆にいえば、成人以前に経験していないと現在の実施程度が低いことがいえる。

また、和室の形態と現在の住生活の程度をみると、和室の続き間があると住生活経験の高位群が多いが、それ以外ではあまり高くない(図11)。続き間座敷を持つような和風の住宅に住んでいるという空間的条件が、昔ながらの住生活の維持に関与していると考えられる。

5-2 季節の行事実施程度について

季節の行事の実施程度についても、表3に挙げる項目を現在と保護者の成人前で、それぞれ「ほぼ毎年する(していた)」「することがある(あった)」「していない」の3段階で尋ねた。現在「ほぼ毎年している」の回答をみると、正月関係行事の実施程度は比較的高いが、節句の行事についてはそれほど高くない。一年の行事の中でも正月は特別に捉えられているようであるが、他の節句行事は簡素化されている様子がうかがえる。

成人以前での経験と現在の実施程度を比較すると、全体に現在の実施程度が低下しており、正月行事においても成人以前に比してかなり実施程度が下がっている。また、年末に家族で大掃除をする程度に低下がみられることから、子どもが大掃除を通じて住まいに触れたり、暮らしについて知る機会が減少していることが推察される(表3)。

季節の行事についても現在と成人以前を、3段階で回答してもらった結果を得点化し、合計点の分布をほぼ3等分してグループ化を試みた^{注10)}。

表3 季節の行事実施程度の現在と成人以前の比較

	(%)	
	成人前 ほぼ毎年していた	現在 ほぼ毎年している
しめ縄や鏡もちなど、正月飾りをする	93.5	69.3
正月にお節料理や雑煮を食べて祝う	94.7	89.5
雛人形や鯉のぼりなど、節句飾りをする	55.1	60.1
冬至のゆず湯や、端午の節供の菖蒲湯に入る	37.2	26.0
七草がゆや節分のイワシなど、いわれのある料理を食べる	56.7	44.6
年末に家族で大掃除をする	77.4	66.9

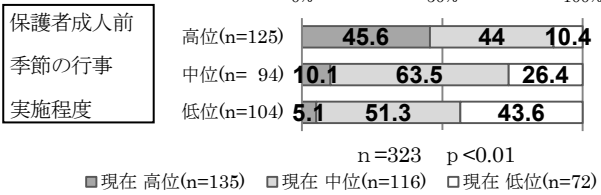


図12 保護者の成人以前と現在の季節の行事の実施程度について

保護者の成人以前における季節の行事の実施経験の程度が現在の実施程度と関係があるかをみると、成人以前に実施程度が高い保護者は現在もよく実施している傾向がみられる(図12)。

5-3 祖父母との同居や伝承機会の程度について

今回の調査対象家庭での、祖父母など高齢の方との同居は約20%であった。同居はしていないがよく行き来する家庭が約36%で、半数強は祖父母などとの接触がよくあると考えられる。逆にみると、約半数は祖父母などと接する機会があまりないことが示された(図13)注11)。

また、保護者に「おじいさんやおばあさんからお子さんに昔のことを話したり、経験させてもらえる機会はあるほうですか」と尋ねたところ、「よくある」の回答が約30%ある一方で、「あまりない」「まったくない」の回答が合わせて約30%を占めた(図14)。

前述の季節の行事の実施程度や昔ながらの住生活経験に、祖父母などとの接触状況や伝承機会の程度と関連性があるのではないかと考え、検討してみた。

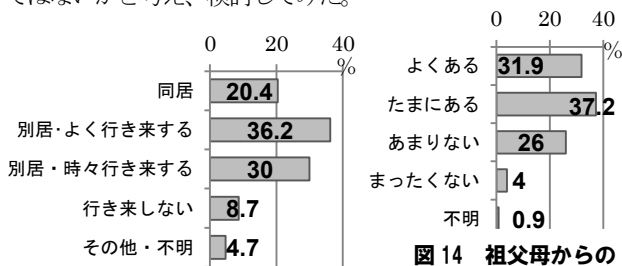


図13 祖父母との同居状況

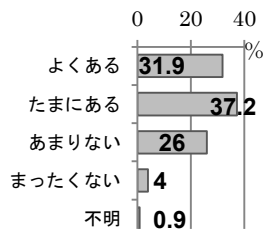


図14 祖父母からの伝承機会の程度

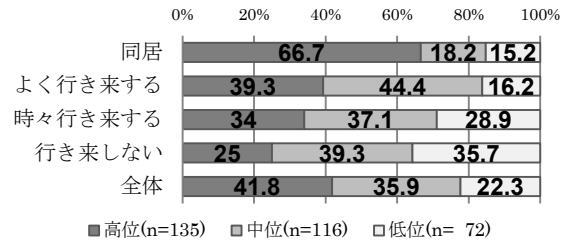


図15 祖父母との同居状況別に見た季節の行事の実施程度

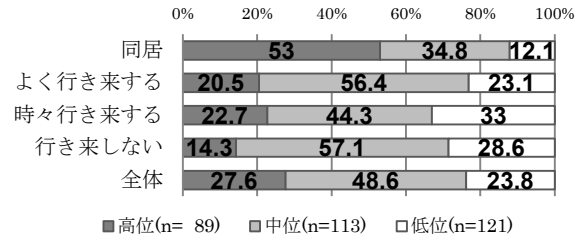


図16 祖父母との同居状況別に見た住生活の実施程度

祖父母との接触程度が高いと、季節の行事や住生活経験の実施程度が高いことが示された(図15・16)。「よく行き来する」「時々行き来する」の差はさほど大きくなく、同居が最も実施程度が高いことから、季節の行事や住生活経験は、祖父母と一緒に暮らしていることの影響が大きいと考えられる。

祖父母からの伝承機会との関係でも、季節の行事・住生活経験ともに、伝承機会のよくある家庭での実施程度が最も高い(図17・18)注12)。子どもの保護者が昔ながらの住まいや暮らしの経験や、伝統的な行事を行っているかどうかは、それを知る祖父母らが子どもの身近にいることや、伝える機会があることが影響していると考えられる。

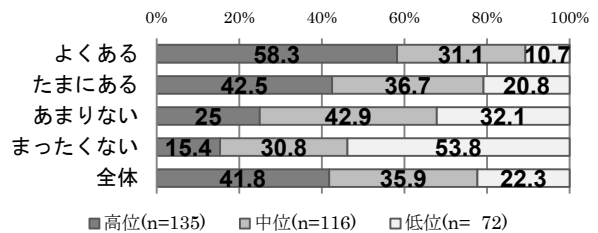


図17 祖父母からの伝承機会程度別に見た季節の行事の実施程度

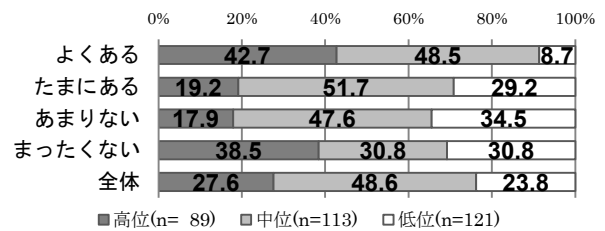


図18 祖父母からの伝承機会の程度別に見た住生活の実施程度

6. 児童の調査結果からみた住生活の実態

6-1 児童の回答にみる現在の住宅について

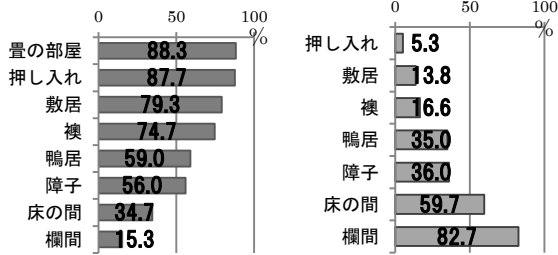


図 19 現在の住宅に和室にかかわる建具やしつらいがある割合(児童回答)

図 20 住宅に和室があるが和室にかかわる建具やしつらいがない割合

つぎに児童の回答について分析を試みた。児童にはイラストと簡単な解説を併記して、和室にかかわる建具やしつらいが実際に住んでいる住宅にあるかをたずねた(図19)^{注13)}。約88%の住宅に和室があったが、そのうちで和室にかかわる建具やしつらいがない割合についてもみてみた(図20)。和室のある住宅で押し入れのない住宅は5.3%しかないが、和室はあっても床の間のない住宅は約60%あり、障子のない住宅も36%あった。保護者の調査結果(図4)と同様に、和室にかかわる建具やしつらいに、よく触れて生活しているとは限らないことが児童調査でも示された。

また、普段の生活で家族が集まって使用する頻度が高いと思われる、夕食を食べる場所やだんらんの場所が和室である割合についてもみてみたところ、それぞれ10.2%、21.6%であった。和室のある住宅に住んでいる割合は約88%あったが、家族の集まる場として日常的に和室を使う家庭はあまり多くないことがうかがえる。

6-2 児童の住生活経験

児童の住生活経験は、保護者とほぼ同じ項目について、それぞれ「したことがある」「したことはないが見たことがある」「したことも見たこともない」の3段階で回答してもらった(図21)。

「したことがある」の項目をみると、「玄関先や庭をほうきで掃く」「季節によって敷物や飾り物をかえる」「打ち水をして涼しくする」は、児童だけでも実施可能であり、比較的实施されている。一方、「はたきを使ってほこりを落とす」「障子やふすまの張り替えや、破れの繕いをする」「障子や襖をはずす」「ほうきを使って畳の部屋をそうじする」などはかなり低い結果であった。「畳を上げてそうじする」は、保護者の回答でもほとんど実施されていないため、児童は見ることもない状況がうかがえる。

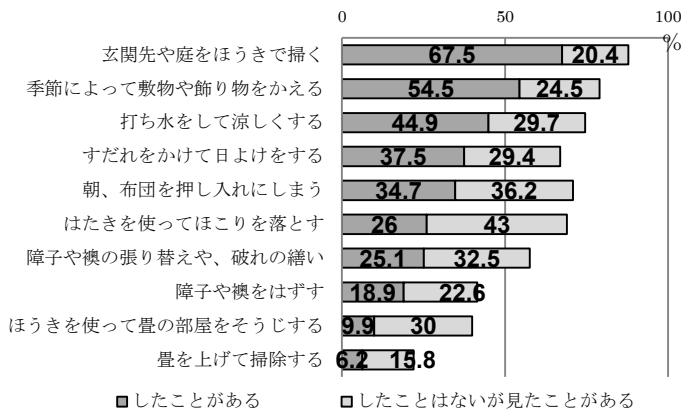


図 21 児童の住生活経験

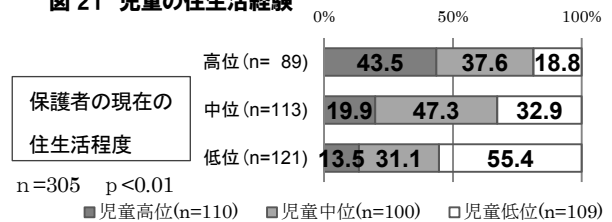


図 22 保護者の住生活程度別にみた児童の住生活程度

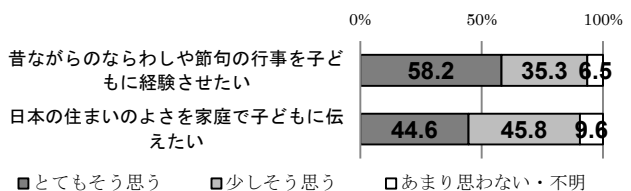


図 23 保護者の昔ながらの行事や暮らしの子どもへの伝承意識程度

児童の住生活経験は、保護者の実施程度の影響が大きいと考えられる。そこで児童の住生活経験の3段階の回答を得点化し、合計点の分布をほぼ3等分してグループ化し^{注14)}保護者の住生活経験との関係を見た。保護者の昔ながらの住生活経験の高いグループでは、児童も経験したり見て知っている程度が高いことが示された。一方、保護者の経験程度が低いグループでの、児童の経験程度の低さが顕著である(図22)。

7. 昔ながらの住まいや暮らしについての保護者と子どもの意識の相互関係

7-1 保護者の住生活意識

和風の暮らしが好きな方であることを保護者に尋ねたところ、53.3%が好きな方であると答え、住宅に和室があったほうがよいという答えは78.3%あった。

和風の暮らしが好きな保護者は多いとは言えない結果であったが、図23に示すように節句などの行事や昔ながらの住生活の文化を子どもたちに伝えたいと願っている保護者は、かなり多いことが示された。

表 4 児童の昔ながらの日本の住まいや暮らしについての意識 (%)

	とてもそう思う	少しそう思う
自分の家に畳の部屋があったほうがよい	43.3	31.6
畳にすわったり寝転んだりするのが好き	38.7	32.5
季節の行事の食べ物を食べるのが好き	39.3	31.9
家で昔ながらの季節の行事を、家族でするのが好き	31.3	33.1

7-2 児童の住意識

昔ながらの日本の住まいや暮らしに対する児童の意識は、表4の項目を取り上げ尋ねた。昔ながらの日本的な暮らしが好ましかについて、「とても」「少し」を合わせると4項目とも約70%が好むという志向がみられた。

特に畳の部屋が家にあったほうがよいと答えた児童が約75%を占め、畳の部屋の雰囲気や畳の感触を好んでいる児童がけっこういることが示された。しかし逆に約30%の児童は「あまり好きではない」または無関心であり、昔ながらの住生活の文化に触れる機会の減少が反映しているのではないかと考えられる(表4)。

7-3 保護者と児童の意識の相互関係

保護者が昔からのならわしや節句の行事などを子どもに意識的に話したり経験させたいと思っているかどうか、子どもの住生活実態にどの程度影響しているかの関係をみた(図24)。保護者の、昔ながらの季節行事を子どもに伝えたいと思っているかという意識の程度が「とても」や「少し」であることと児童の住生活経験の程度はさほど変わらない。しかし、「あまり思わない」グループでの児童の経験程度の低さが際立っている。子どもの住生活経験度の低さの要因として、保護者の伝えたいという意識が低いことの影響が大きいと推察される。

また、保護者の季節の行事実施程度と、子どもがそれを好きと感じているかの関係をみた(図25)。保護者が季節の行事を実施している程度が高いと児童がそれを好きと感じている程度が高かった。子どもが昔ながらの行事を好きと感じるには、家庭でそれを楽しんでいるかが関わっていると思われる。

また、保護者の意識が児童の意識にどのように反映しているかについても検討してみた。保護者が意識的に季節の行事について話したり、経験させたいと思っている程度が高いと、子どもが好きと感じている程度が高いことが示された(図26)。

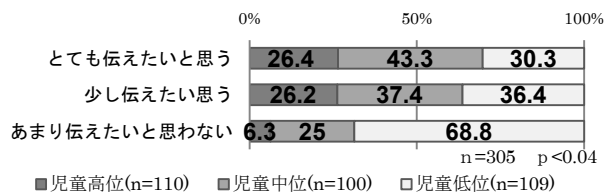


図 24 保護者の昔ながらの行事の伝承意識程度別にみた子どもの住生活程度

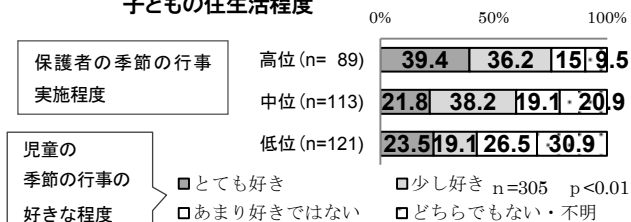


図 25 保護者の季節の行事実施度別にみた児童の行事の好きな程度

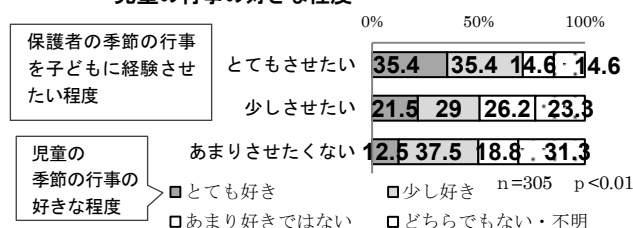


図 26 保護者の行事やならわしを経験させたい意識程度別にみた児童の季節の行事の好きな程度

保護者が季節の行事などを子どもに意識的に伝えたいと考え、家庭で実施していると、子どもにも自然にそれが伝わり、昔ながらの行事などを「好き」と感じる割合が高くなると推察される。

8. 学校教育に対する保護者の要望

既に述べたように、日本の住まいや暮らしのよさを多くの保護者が子どもに伝えたいと考えているが、一方で住宅の形態が変化していることに加え、季節の行事や昔ながらの住生活を体験する機会が、家庭では少なくなっている現状がみられた。そこで、保護者に、学校教育の中で昔ながらの住まいや暮らしについて教えてほしいと思っているのか、また、どのような場面で教えてほしいと考えているのかを尋ねた。

図27にみるように、教科や様々な活動を通じて子どもたちに教えてほしいという、保護者の要望がみられる。

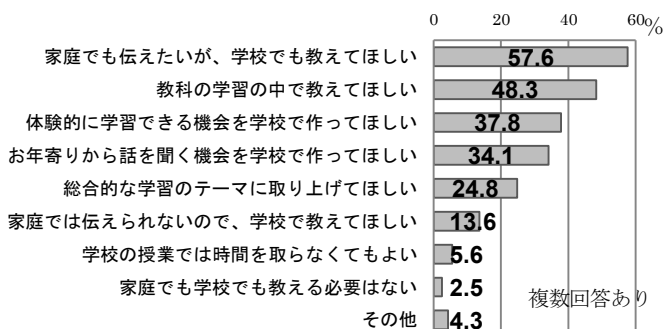


図 27 子どもたちに昔ながらの住文化を学校で教えることについて

また、「家庭でも伝えたいが、学校でも教えてほしい」の項目を取り上げると、「日本の住まいや暮らしの良さを家庭で伝えたいと思うか」という設問(図23)に、「とてもそう思う」と回答した保護者(144名)の回答率が75%にのぼった。日本の住まいや暮らしの良さを家庭で伝えたいと思っている保護者が、さらに強く学校に期待している傾向がみられた。

9. まとめ

今回の調査結果から、以下の点が明らかになった。

1) 調査対象者の住宅には、畳の部屋はあっても和室の基本的な建具やしつらいがない事例が多く、本格的な和室は少なくなっている。その中で、和室の続き間があるなど、和風の住宅の場合は、季節の行事や昔ながらの住生活がなされている割合が高いことが示された。

2) 保護者が成人以前に季節の行事や昔ながらの住生活の経験が豊富な場合、また児童が祖父母などと接する機会が多い場合は、家庭での季節の行事や昔ながらの住生活の実施程度が高くなる傾向がある。

3) 保護者が季節の行事などを児童に意識的に伝えたいと考え、家庭で実施することが、児童の意識に反映している。また、学校で昔ながらの住文化を教えてほしいという保護者の希望が少なくないことが明らかになった。

以上から、日本の昔ながらの住文化を子どもたちに家庭の中で継承しやすい要件としては、①基本的建具やしつらいを備えた和室があること、②保護者自身にも経験があること、③祖父母など昔ながらの住まいや暮らしを知る人と接触する機会があることが重要な要素と考えられる。

しかしながら、現在の家庭での実生活の中でこうした要件を整えることは、難しいのが実情であると思われる。加えて、アンケート調査の結果に見られるような保護者の希望も踏まえると、学校教育の中で伝統的な住文化を取り上げることが必要ではないかと考えられる。小学校では総合学習のほか家庭科や社会科など様々な教科で横断的に指導することも可能であり、その中に伝統的な住文化の学習を具体的にどう取り入れるのか、どう教材化していくのかなど、実践研究が今後の課題である。

謝辞: 調査にあたっては、配布・回収作業も含め、八尾市内5小学校の校長および5年生担任の先生方にご協力いただいた。

注釈

注1) 筆者の約30年の教員生活でも、雑巾の絞り方やほうぎの使い方がわからないなど、様々な場面で子どもたちの生活力の低下が感じられる。

注2) 本研究は、文2)に示す日本建築学会近畿支部研究報告会での発表論文をさらに加筆発展させたものである。

注3) 八尾すまい・まちづくり研究会、<http://www.machi-ken.com/>

注4) 小学校中学年の「社会科」での「昔の暮らし」の単元では、「おじいさんおばあさんが子どもの頃の暮らし」として昭和30~40年代頃の様子を学習する。小学生が初めて昔ながらの住生活について学習する内容に準じてこの年代に焦点を当てた。

注5) 子どもの季節の行事の実施程度や家事への参加など、住生活力について文9)に示すような調査研究がされているが、地域への関心や行動などの地域力との関連で報告されたもので、本研究とは目的を異とする。

注6) 調査対象の5校は、八尾市中心部に位置する市街地2校、山麓で田畑も多く3世代同居が多い旧村部2校、および新しい住宅開発地1校である。今回の調査では、地域的な特色による保護者の意識等に大きな差は見られなかった。

注7) 回収した保護者のうち、母親は290人(30歳代43.1%、40歳代55.9%)で、父親22人、祖母5人、その他・不明6人であった。なお、児童と保護者の一致するのは301セットである。

注8) ここでは住生活の程度について大きな傾向を把握し、他の事との関連をみるために、大まかに3つのグループに分けたもので、厳密な3等分ではない。他のグループ化についても同様である。

注9) 保護者の成人前の住生活経験程度のグループ構成は、高位115人(35.6%)、中位113人(35.0%)、低位95人(29.4%)。

注10) 保護者の季節の行事の実施程度グループ構成は、高位135人(41.8%)、中位116人(35.9%)、低位72人(22.3%)。保護者の成人前の季節の行事実施程度グループ構成は、高位125人(38.7%)、中位94人(29.1%)、低位104人(32.2%)。

注11) 祖父母との同居状況の回答は児童対象の調査による。

注12) 図18での祖父母からの伝承機会がまったくない項で住生活経験が高位の割合が38.5%と高い値が示されたのは、実数が13人中5人の割合である。

注13) 図19は保護者回答の図4とほぼ同様であるが、児童回答の鴨居がある割合が保護者の回答より約10%高くなった要因として、児童用のアンケートではイラストと簡単な解説を併記したことが考えられる。

注14) 児童の住生活経験程度のグループ構成は、高位110人(34.5%)、中位100人(31.3%)、低位109人(34.2%)。

参考文献

文1) 文部科学省小学校指導要領(1998年12月告示、2002年4月施行)

文2) 奥田千尋・碓田智子、日本の住文化を伝えるための住教育に関する研究—小学生のいる家庭における伝統的住文化の継承実態と保護者の住意識—、日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系、pp.701-704、2010

文3) 碓田智子、住教育—学校教育から居住施策へ、(財)住宅総合研究財団編、「現代住宅研究の変遷と展望」所収、第1部第5章4、pp.117-123、丸善株式会社、2009

文4) 「住まい・まち学習」実践報告・論文集1~10、(財)住宅総合研究財団住教育委員会、2000~2009

文5) 堤 裕子・大友 重明・須貝 賢一、学びを地域で具現化する総合的な学習の取り組み—「立町再発見!未来の西公園デザイン」「めざせ!立町環境レスキュー隊—立町環境プロジェクト2004—」の実践を通して—、「住まい・まち学習」実践報告・論文集6、(財)住宅総合研究財団、pp.9-14、2005

文6) すまい学習をサポートします—住教育・建築教育の実践集—、(社)兵庫県建築士会 住教育支援チーム、神戸市すまいの安心支援センター「すまいるネット」、2007

文7) 酒井喜八郎、総合学習「地域に残る筏文化から名古屋のまちの発展を支えてきた堀川の学習へ」、「住まい・まち学習」実践報告・論文集6、(財)住宅総合研究財団、pp.3-8、2005

文8) 林美恵子、「住まいの方の工夫—和室から住まい方を考える—」、社団法人・住宅生産団体連合会「まちと住まい」実践事例集、<http://sumai.judanten.or.jp>

文9) 曲田静維・長岡志保、子どもの住生活力と地域力の実態—子どもの暮らしに関するアンケート調査から—、平成16・17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書「子どもの住生活力と地域力を育む『総合学習・住まう』のカリキュラム開発に関する研究」所収、pp.33-51、2006